shi 1977. Acta Phytotax. Geobot. **28**: 143-151. Manton, I. & W. A. Sledge 1954. Phil. Trans. Roy. Soc. London **238**B: 127-185. Nakamura, J. & T. Shibasaki 1959. Research reports of the Kochi Univ. **8**: 1-11. Pl. I-VIII. Nakato, N. & K. Mitui 1979. Journ. Jap. Bot. **54**: 129-136. Pl. III-VI. Ninan, C. A. 1958. Cytologia **23**: 291-316. Sahashi, N. 1976. Journ. Jap. Bot. **51**: 326-339. Pl. VII-XI. Verma, S. C. & D. S. Loyal 1960. Curr. Sci. **29**: 69-70.

* * * *

アリサンハナワラビは広く東南アジアに分布し，ハナワラビ科のなかでは形態学的に他の種類とは異なった興味ある幾つかの点を持っている。この種の細胞学的な研究は断片的になされているが，広い分布域でのまとまった研究はない。そこでこれまでの細胞学的な知識と胞子の形態から，この種の分布域内においてこれまで知られている3種類の種内倍数体(4X，6X，8X)がどのように分布しているかを，胞子の形態を重視して，50個体の倍数性を調べた。6Xと8Xは染色体のカウントされた個体からの胞子は得られなかったが，種内倍数化にともなう胞子の形態の変化を把握し，あわせて気孔の大きさも参考とし，無理なく3種類の種内倍数体の分布図を作製した。その結果，倍数化による明確な分布域の境界はみいだせなかったが，インド亜大陸にはおもに4Xが分布し，インドネシアの島々には8Xが広く分布しているようである。また6Xもどちらの分布域にもわずかにみいだせる。Jermyらがニューギニアに4Xの存在を示唆したが，今回の胞子の観察結果から十分その存在を認めることができる。

□上野益三：**博物学史論集** 595+32pp. 1984. 八坂書房，東京．￥15,000. 過去20年にわたる論文52篇の転載をふくむ著作集。「本草学と博物学」の章には小野蘭山，畔田翠山，飯沼慾斎，岩崎常正らの人物と業績を記し，「植物」では薬園や腊葉帖にふれ，「西洋博物学断章」ではビュルゲル，フッカー父子などの記事，「人物」では明治以後の矢田部良吉，他7人のナチュラリストを記述，「動物」では象，カワウソ，ニホンオオカミなどにふれ，「動物学」では動物学史に関する5篇を入れ，「本」では本とのふれあいを述べる。巻頭に10図版，巻末に著者の博物学史関係著作目録あり。本書の索引，著者経歴抄を付す。日本博物学史と，その第1人者の著者を知る上に欠かせない書物である。

(木村陽二郎)